

研究開発4 海外グローバル研修

1 目的と期待される成果

(1) 目的

海外で研修を実施し、課題研究の成果を発表し、ディスカッションすることにより、異文化を理解するとともに、グローバル社会における生き方・在り方について考え、課題研究を深める。

(2) 期待される成果

日本の歴史・伝統・文化を世界に発信し、国際社会を牽引するリーダーとしての資質や能力が身に付くことが期待できる。

2 内容

- ① S G H イギリス海外研修
- ② S G H ドイツ海外研修
- ③ S G H シンガポール海外研修
- ④ オランダ派遣
- ⑤ オーストラリア短期研修

3 実施方法

各研修については、普通科の生徒から選抜する。

- ① S G H イギリス海外研修（10名）2年次に実施
- ② S G H ドイツ海外研修（10名）2年次に実施
- ③ S G H シンガポール海外研修（20名程度）2年次に実施
- ④ オランダ派遣（5名）1年次に実施
- ⑤ オーストラリア短期研修（20名）2年次に実施

実施後、活動報告書及び活動の記録等を基に学校設定科目「G L アクティブ」の評価とする。

4 検証評価方法

検証方法は、生徒及び教員に対して、取組ごとに記名式4択式アンケートを実施し、その結果と健康状態の調査等の結果により評価する。また、保護者の評価も取り入れる。

5 実施内容

(1) オーストラリア

【ア 概要】

日 時	令和元年7月20日（土）～8月3日（土）14泊15日
訪問先	ブリスベン、ナンボー・クリスチャンカレッジ等（オーストラリア連邦）
参加者	2学年生徒20名 男子5名、女子15名 引率教員 教諭 鬼崎 晴雄（英語）、教諭 東森 彩理沙（地歴・公民）
目 的	1 現地の高校生を対象とした課題研究の発表や現地高校生・大学生とディスカッションを通じて、異なる観点からのフィードバックを受けるとともに、異なる視点を 得ることにより、課題研究を深化させる。 2 現地の家庭や交流校での参与観察を通して、日本との比較を行い、グローバルな 課題について探究を深める。 3 英語によるコミュニケーション能力を高める。 4 異文化理解を深めるとともに、自国の文化を再認識する。

【イ 日程】

月 日	スケジュール等	宿 泊
令和元年 7月20日(土)	・成田発	機内
7月21日(日)	・ブリスベン空港着 ・フィールドワーク(クイーンズランド博物館・ローンパインコアラ園・マウントクーサ展望台) ・ナンボー・クリスチャンカレッジへ移動	ホームステイ
7月22日(月) ～7月25日(木)	(ナンボー・クリスチャンカレッジ語学研修)	ホームステイ
7月26日(金)	・日本文化プレゼンテーション, ナンボー・クリスチャンカレッジ生徒とグループトーク	ホームステイ
7月27日(土) ～7月29日(月)	(ナンボー・クリスチャンカレッジ語学研修)	ホームステイ
7月30日(火)	・課題研究発表, ナンボー・クリスチャンカレッジ生徒とディスカッション	ホームステイ
7月31日(水) ～8月1日(木)	・ナンボー・クリスチャンカレッジ語学研修・交流会	ホームステイ
8月2日(金)	・クイーンズランド大学訪問, 講義, 大学生とのディスカッション	ホテル
8月3日(土)	・ブリスベンへ移動, 空港発 ・成田着	

【ウ 事前指導】

回	日時	学習内容
1	4月11日(木)	自己紹介・リーダー決め・連絡網作成・課題研究について
2	4月19日(金)	保護者説明会
3	4月26日(金)	グループ決め・日本文化紹介プレゼン準備
4	5月 9日(木)	日本文化紹介プレゼン準備
5	5月10日(金)	前年度派遣生徒との交流会
6	5月15日(金)	オーストラリア地誌の講義
7	5月28日(火)	日本文化・日本語原稿提出
8	6月 8日(金)	SGH課題研究・日本語原稿提出
9	6月13日(木)	英語原稿・PPスライド準備
10	6月14日(金)	日本文化・SGH課題研究発表英語原稿提出
11	7月 8日(月)	SGH課題研究発表リハーサル(英語)
12	7月10日(水)	日本文化紹介リハーサル(英語)
13	7月12日(金)	SGH課題研究発表リハーサル(英語)
14	7月17日(水)	日本文化紹介リハーサル(英語)
15	7月19日(金)	SGH課題研究発表リハーサル(英語)・結団式

*この他、英語で様々なことを説明する準備として、昼食時の会話練習(ALTと共に週1回)

【エ 現地での活動】

（ア）日本文化発表

ナンボーカレッジの7, 8年生（中学1, 2年生相当）日本語選択全員約80名（各クラス約20名×4クラス）を対象に、英語で日本文化の発表を行った。各クラスでは4つのテーブルに分かれて、A3用紙（写真やグラフなど）とテーマに必要な現物を用い、それぞれの発表を行った。その後、各自が準備した質問を聞いたり、アンケートを記入してもらったりした。1回のセッションは質疑応答を含めて約8分間だった。それを4回、4クラス合計で16回繰り返した。

発表テーマ

- ① 「日本のコメのお菓子」
- ② 「佐倉の紹介」
- ③ 「日本固有の道具」
- ④ 「お茶」

（イ）SGH課題研究発表

ナンボーカレッジの10年生（高校1年生相当）の生徒20名を対象にSGH課題研究発表を行った。テーマごとに4グループに分かれて発表した後、各自が準備した質問を聞いたり、アンケートを記入してもらったりした。発表は、質疑応答を含めて各グループ約12分間だった。

- ① 「節水」
- ② 「食品ロス」
- ③ 「食物アレルギー」
- ④ 「ジェンダーギャップ」

オーストラリアでは日本に比べて水を確保するのが難しく、巨大な雨水の貯水タンクが校内にもいくつか設置されており、節水問題に関しては特に反応が多かった。また、グルテンアレルギーの生徒も日本に比べて多いようで、またレストランでもグルテンフリーのメニューが用意されているなど、当たり前のように配慮されていたこともあり、食物アレルギーについても質問が多かった。

（ウ）日本文化発表・課題研究発表の考察

日本文化については発表の機会が十分にあったことにより、かなりの上達が見られた。後半2クラスは年齢上のためか、生徒がおとなしい印象を受けたが、本校の生徒が自信を持って発表できたことにより、原稿を見ずに、相手の反応をみて受け答えをしながら話したり、使う表現を変えてみたり、実物を効果的に使って説明できるようになった。相手に伝えることの大切さを学ぶことができたようである。

これは、反復発表の機会が無かったSGH課題研究の発表でも生かされた。自分の言葉で専門的な内容を話すことには不安も見られたものの、聴衆に発問をしたり間をとったりと、惹きつけるような工夫をしながら発表をすることができた。

（エ）クイーンズランド大学訪問

① キャンパスツアー

約1時間のキャンパスツアーでは、様々な学部の校舎、博物館等を見学した。広大な敷地に、まるで一つの街のようにさまざまな施設があり、さらに池や竹林などがあって自然と一体化したつくりになっており、生徒は感銘を受けていた。

② 大学生とのグループトーク

前半に課題研究発表、後半はグループトークを行った。

課題研究発表は4つのグループが10分ずつ発表を行い、その後、質疑応答を行った。大学生の鋭い質問に対して、生徒はなんとか答えることができていた。オーストラリアの大学生の視点からの意見、助言をもらったことで、生徒は自分の課題に対して新たな疑問や発見をすることができたようである。

後半は生徒を三つのグループに分け、グループトークを1時間実施した。生徒は用意した課題研究の質問をしながらディスカッションを行った。日本語を学ぶ大学生であったため、日本の文化についても多少の知識を持っており、話もしやすい様子であった。ただ、今回は生徒20人に対して学生3人であったので高校生一人当たりができる質問は限られた。また課外研究についても、人数がもう少し多ければ、さらに多くの視点から意見を聞くことができたのではないかと。

③ 講義

“Introduction to Australia’s National Environment” というトピックで、オーストラリアの動植物の多様性について講義が行われた。予定されていた、オーストラリアの歴史や文化についての講義から変わって、動植物の多様性という、理系寄りの内容であったが、生徒は概ね理解し、オーストラリア原産のは虫類の巨大さに驚きの声をあげる場面もあった。事前の研修ではオーストラリアの歴史文化多様性について学んでいたが、また別の視点からオーストラリアについて理解を深めることとなった。

【オ 事後指導】

(ア) レポート

帰国後、生徒は研修の成果をレポートにまとめて提出した。

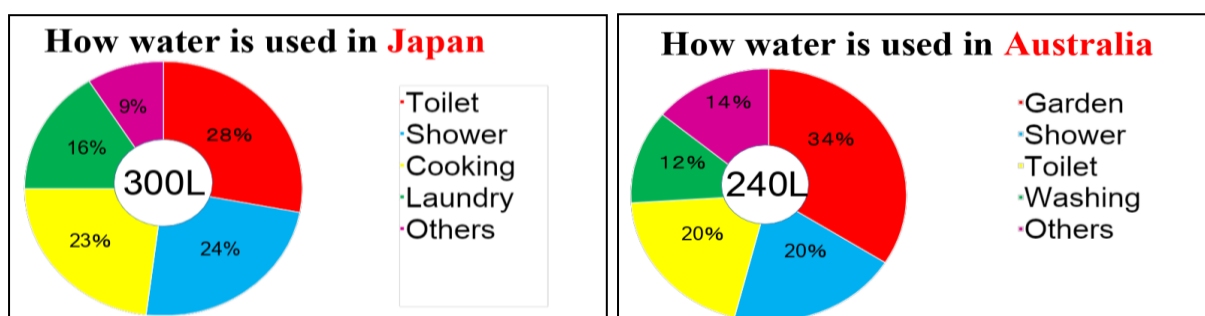
日本文化発表の和菓子についての発表では、煎餅の試食をしてもらい、醤油や塩味よりもざらめの甘い味のものが好まれるという結果が出ていた。今後和菓子を海外に広めるにあたっての参考になったようだ。また、課題研究発表のジェンダーについての発表では、家庭での夫婦の家事分担について聞き取り等を行い、「専業主婦」という言葉がなく、家族で協力して家事を行うため日本に比べて女性が行う家事負担が少ないことがわかったようだ。以下は「災害時の水の確保」について研究している生徒のレポートの、課外研究に関する部分から抜粋したものである。

レポート

私たちは水をテーマに SGH 課題研究を行った。まず日本での準備段階では、日本とオーストラリアの各家庭ではそれぞれどのくらいの量の水を使っているのか、またその内訳などを調べた。オーストラリアは降水量が年間を通して日本より少なく、日本よりも節水に力を入れているなど水について関心が高いことなどがわかった。

実際にオーストラリアに行ってホームステイをすると、水を大切に使うオーストラリアの文化を体験することができた。また、ナンボー・クリスチャンカレッジの生徒に課題研究発表をした際に、オーストラリアの節水方法について教えて欲しいと聞いてみると、いろいろな節水方法を教えてくれた。例えばシャワー用に雨水をためるタンクを家庭に用意しておくこと、風呂を毎日とはめないこと、お皿を洗う時にはシンクに水をためてその中ですすぐだけにする、家庭によっては食洗機を使って余計な水を使わない用になっていること、などである。

プレゼンテーションの準備から発表までで学んだことは、日本人はもっと水の大切さを理解しないといけないということだ。災害などの緊急時には日本の確保が問題になることがある。私たちは水が限りあるものであることを周知させ、日常と緊急時、両方の場合に必要な節水方法を広めていくべきであると感じた。



(イ) 報告会

- ① 日時 令和元年10月8日(火) 6, 7限 GL探究(総合的な学習(探究)の時間)
- ② 対象 1, 2学年生徒
- ③ 場所 本校体育館
- ④ 内容 課題研究の発表やアンケート、クイーンズランド大学訪問について報告した。

(3) アンケート

帰国後、参加生徒にアンケートを実施した。

1 この研修に参加して日本の歴史・伝統・文化をより深く理解する必要性を感じた。			
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
14人	6人	0人	0人
2 この研修に参加して外国の歴史・伝統・文化に関する興味・関心が高まった。			
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
18人	2人	0人	0人
3 日本の歴史・伝統・文化を外国人に英語で説明することができる。			
かなりできる	まあまあできる	あまりできない	全くできない
2人	15人	3人	0人
4 あるトピックについて英語でプレゼンテーションすることができる。			
かなりできる	まあまあできる	あまりできない	全くできない
7人	12人	1人	0人
5 あるトピックについて英語でディスカッションすることができる。			
かなりできる	できる	少しできる	全くできない
2人	9人	9人	0人
6 今回の海外研修で、課題研究に関する新たな（異なる）視点・情報を得る機会があった。			
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
7人	9人	4人	0人
<ul style="list-style-type: none"> ・ホームステイを通して日本とは異なる文化を実感することができたので、これを課題研究のテーマであるインバウンド観光に繋げることができる。 ・外国人向けの災害対策リーフレットを今後作るが、大きい地震が少ない国の人目線で考え、作っていく必要があると気がついた。 ・現地校の生徒からの質問で新たな疑問を見つけることができた。 ・オーストラリアの人々の水に対する意識調査をすることができた。また、水不足とどのように向き合っているのか実際に生活することで理解することができた。 ・オーストラリアの多民族文化や自然を身近に感じることで、日本と異なるところや似ているところを知り、視野が広がった。 ・調べただけではわからない、オーストラリアと日本の違いをたくさん見つけることができた。 ・日本について聞かれても答えられないことがあったので勉強不足だと思った。 ・オーストラリアのお父さんの育児参加への意識の高さや、人々の環境への意識の高さを感じた。 ・実践的な授業が多く、生徒が積極的に質問したり、自分の意見を述べていた。 ・思ったよりも英語を話すことができて自信になった。自分がいつも聴いている英語と違って聞きづらかったけれど、このような英語もあるのだなと勉強になった。 ・コミュニケーションのための英語と書くための英語との違いや、上手に伝えようとするより、まずは話してみることが大切だ、とALTの先生や英語の先生が常日頃言うのがとてもよくわかった。 ・初日に比べてニュース番組や会話が聞き取れるようになった。 ・気持ちを伝えたくても英語が出てこなくてもどかしい気持ちになったので、伝えられることが増えるように頑張りたいと感じた。 ・自分から話そうとすることが大切だと感じた。 ・英語での会話の楽しさやお互いの文化を教え合う大切さを学んだ。大学生になったらもう一度留学するために英語力と高め、日本文化への理解を深めたい。 			

【カ 成果と課題】

日本文化や課題研究の発表へのコメントやそれに関連する聞き取りやアンケート調査を行うことで、オーストラリア人の見方・考え方を知ることができた。新たな視点で物事を見るという経験が今後の研究に生かせるか、追ってみていく必要がある。

発表内容がこの後の自分たちの課題研究と連続している生徒にとっては、現地での発表・調査が今後の貴重なデータになった。同じ研究をしている者全員がまとまって班を組み研修に参加することは不可能であるため、発表内容と課題研究テーマが異なる生徒が出てくることは当然ある。彼らは、自分たちが使うことができるデータを発表から直接得ることはできなかったが、時間を見つけて独自に調査する様子がみられた。

課題研究の発表では、難しいテーマのためか、質問に答える際に自分の言葉で伝えることに難儀していた。日本で準備する短い時間の中で、調べたものを原稿にまとめて説明する力がついたので、応用力を身につけることが今後の課題である。

ホームステイや、バディの生徒と同じ授業に参加することで、現地の暮らしや文化を实际体験したことで、課題研究を進めるためのヒントや、新たな疑問の発見に繋げることができた。初めは言葉の壁に戸惑ったり、コミュニケーション不足によってお互いに誤解が生じて不安になったりすることもあったようだが、ホームステイ先で発表リハーサルをホストファミリーに聞いてもらい意見をもらうなど、課題研究を通してコミュニケーション能力を高める相乗効果があった。



ナンティンクリスチャンカレッジでの課題研究発表



大学生とのディスカッション

(2) シンガポール

【ア 概要】

日 時	令和元年9月18日（水）～9月21日（土）3泊4日（機内泊1日を含む）
訪問先	クレア（自治体国際化協会）・シンガポール事務所 St.Joseph's Institution（セントジョセフ中高校），シンガポール国立博物館 ナイトサファリ
参加者	2学年生徒17名 男子4名 女子13名 引率教員 教諭 高柳 良訓（地歴・公民）， 教諭 井守 雄一（英語）
目 的	1 現地の学生との交流を通じて国際的視野を広げ、さらに英語によるコミュニケーション能力を高める。 2 異文化への理解を深めるとともに、自国の文化を再認識する。 3 現地の高校生を対象に課題研究の成果を発表するとともに、ディスカッションを行い、考えを深めたり異なる視点を得たりすることにより、課題研究を深化させる。

【イ 日程】

月日	スケジュール等	宿泊
令和元年 9月18日(水)	・羽田発 シンガポール着 ・フィールドワーク（イスラム寺院，仏教寺院見学等）	ホテル
9月19日(木)	・フィールドワーク（シンガポール国立博物館：博物館等で日本との歴史伝統文化比較） ・クレア（自治体国際化協会）シンガポール事務所訪問（現地校でのプレゼンテーションに向けた準備，事務所職員による英語でのプレゼンテーション等への助言等）	ホテル
9月20日(金)	・St.Joseph's Institution でのプレゼンテーション，ディスカッション，授業体験 ・フィールドワーク（リトル・インディア，ナイトサファリ） ・シンガポール発	機内
9月21日(土)	・成田着	

【ウ 事前指導】

(ア) 日程

回	日 時	学習内容
1	6月11日（月）	リーダー決め・連絡網作成・課題研究について
2	6月25日（火）	研究内容と派遣を見据えた今後の取り組みについて
3	7月 8日（月）	シンガポールの歴史・文化・風土についての特別講座 講師：関教諭（社会科）
4	7月10日（水）	プレゼンテーションの枠組み作成（日本語）①
5	7月11日（木）	プレゼンテーションの枠組み作成（日本語）②
6	7月12日（金）	プレゼンテーションの枠組み作成（日本語）③
7	7月16日（火）	プレゼンテーションの枠組み作成（日本語）④
8	7月17日（水）	プレゼンテーションの枠組み作成（日本語）⑤
9	7月18日（木）	プレゼンテーションの枠組み作成（日本語）⑥
10	7月19日（金）	プレゼンテーション（日本語）と発表内容の修正
11	7月25日（木）	プレゼンテーションとアンケート作成（英語）①
12	7月31日（水）	プレゼンテーションとアンケート作成（英語）①
13	8月 7日（水）	プレゼンテーションとアンケート作成（英語）②
14	8月19日（月）	プレゼンテーションとアンケート作成（英語）③
15	8月26日（月）	プレゼンテーションとアンケート作成（英語）④
16	8月30日（金）	リハーサルと発表内容の修正①
17	9月 3日（火）	リハーサルと発表内容の修正②
18	9月 6日（金）	リハーサルと発表内容の修正③
19	9月12日（木）	結団式・校長挨拶・引率挨拶・台詞の暗記とリハーサル①
20	9月13日（金）	台詞の暗記とリハーサル②
21	9月17日（火）	最終確認

*この他，英語で様々なことを説明する準備として，昼食時の会話練習（ALT と共に週1回）

【エ 現地での活動】

(ア) St.Joseph's Institution (SJI) での発表・討議内容 本校生徒 17名, SJI 生 30名

課題研究テーマ	発表形式
Finding Water in Emergency	口頭発表
Dietary Symbols for Various Kinds of People	口頭発表
New Childcare Centre System	口頭発表
Welcome to Sakura	ポスター発表
Emergency Information Brochure	ポスター発表
Reducing Food Loss ~My Box Project~	ポスター発表
Sweet Bean Paste	ポスター発表
Prevent Elderly People from Becoming Malnourished	ポスター発表



※ SJI 生からの質疑応答例（日本語訳）

○ Finding Water in Emergency

Q 濾過装置作成の身近な材料として案はいくつかありますか。

A 現時点ではありません。これから一つずつ材料を組み合わせせて試していきたいと思います。

○ New Childcare Centre System

Q 学生はボランティアとしてしか参加できないのですか。

A このシステムに参加することで、学校から単位がもらえるようにしたいと思っています。

○ Emergency Information Brochure

Q リーフレットには避難経路や避難所の場所、緊急時の電話番号なども載せてはどうですか。

A 紙面にどれだけの余裕があるかによりますが、可能であるならば導入していきたいと思います。

Q 防災頭巾とはどんなものですか。

A 地震発生時に頭を守るために使います。普段はクッションとして使われます。

Q 避難訓練は年に何回行われますか。

A 2, 3 回行われます。

○ Welcome to Sakura

Q ひよどり坂の竹林を見て佐倉に興味を持ちましたが、佐倉への行き方が分かりません。

A 佐倉は成田空港から電車で20分ほどです。ひよどり坂へは佐倉駅から少し歩きますが、そんなに遠くはありません。

Q もっと佐倉についての詳しい情報が欲しくなりました。

A ホームページが改良されれば、より多くの魅力ある観光スポットを紹介できるようになると思います。

○ Sweet Bean Paste

Q シンガポールでは日本食を紹介するバザーやフェスティバルのようなものがあります。そういったものを利用してあんこを広めてみてはどうですか。

A とても良いアイデアなので、可能であるならば参加してみたいと思いました。

○ Prevent Elderly People from Becoming Malnourished

Q 噛む力が弱まった人にはどのような対策が考えられますか。

A 材料を小さいサイズに切って作ったお総菜等の販売を考えています。

Q 低栄養素解決策について、例として「3食の食事」「楽しいと思える食卓」、「バランスの取れた食事」を挙げられましたが、「バランスの取れた食事」以外は原因と直接関係がなく、考える必要はないのではないですか。

A その他の2つの解決策は「バランスの取れた食事」の取れる環境作りを支えるもので、無視できない要素と考えています。

(イ) St. Joseph's Institution (SJI) での現地調査例「あんこ試食会」

(研究概要)

栄養があり、健康に良い「あんこ」を世界に広めたい。あんこは多くの和菓子に使用されているが、海外の人に受け入れられない理由は過度な砂糖の使用にあると考えた。本研究においては、砂糖の甘さを中和させるものとして、いくつかの飲み物との相性を調べたい。

あんこ試食会の概要

日本の市販のあんこをシンガポールに持って行った。まず、あんこを市販のプラスチックスプーンで食べてもらい、食べた後にお茶等の甘さを中和させる飲み物を飲んでもらって感想を書いてもらった。中和させる飲み物として、日本からはほうじ茶と煎茶を持って行き、現地で緑茶とコーヒーを準備した。

調査結果

○あんこがおいしいという感想を多くの生徒が持ったが、中にはあんこを拒絶する人もいた。

○あんこと日本茶の組み合わせが一番おいしいという感想を多くの生徒が持った。

○少数ではあるが、あんことコーヒーの組み合わせが一番おいしいという生徒もいた。コーヒーの中に溶かしてもおいしいのではないかという意見ももらった。

考察

○試食会前の調査では、「あんこの甘さは海外では受け入れられない」ということであったが、あんこの食感や味を好んだ生徒も多く、アジア圏では受け入れられる甘さであるかもしれない。

○日本茶との相性の良さを裏付ける結果が得られ、あんこを日本茶とともに食す文化を広められる可能性がでてきたのではないかな。

【オ 事後指導】

(ア) 報告会

① 日 時 令和元年10月8日(火) 6限 GL探究(総合的な学習の時間)

② 対 象 1・2学年生徒

③ 場 所 本校体育館

④ 内 容 セントジョセフ中高校でのSGH課題研究の発表や質疑応答の内容、アンケート結果等について報告した。

(イ) アンケート

① この研修に参加して日本の歴史・伝統・文化をより深く理解する必要性を感じた。

かなりできた	まあできた	あまりできなかった	全くできなかった
12人	5人	0人	0人

② この研修に参加して外国の歴史・伝統・文化に関する興味・関心が高まった。

おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
16人	1人	0人	0人

③ 日本の歴史・伝統・文化を外国人に英語で説明することができた。

かなりできた	まあできた	あまりできなかった	全くできなかった
0人	11人	6人	0人

④ 自分の課題研究をシンガポールの高校生を対象に英語でプレゼンテーションすることができた。

かなりできた	まあできた	あまりできなかった	全くできなかった
9人	8人	0人	0人

⑤ 課題研究の内容についてシンガポールの高校生と英語で話し合うことができた。

かなりできた	まあできた	あまりできなかった	全くできなかった
4人	12人	1人	0人

⑥ 今回の海外研修で、課題研究に関する新たな（異なる）視点・情報を得る機会があった。

おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
8人	9人	0人	0人

⑦ 生徒感想（自由記述）

- ・実際に海外へ出向いて現地の方々と交流する中で、それぞれの国にはそれぞれの背景があることを改めて感じた。
- ・新しい学童のシステムを日本で広めることばかり考えていたので、シンガポールの学生の評価の高さに驚いた。「世界にも広めていったらどうか」という提案があり、世界にも発信できる可能性があることを知った。
- ・店員さんがお客さんによって言語を変えて話していた。多民族国家ならではの接客方法があることに気づいた。
- ・英語が通じるとこんなに楽しいんだと気づいた。次回海外へ行くときまでにもっとリスニング力を上げて、スムーズに会話ができるようにしたい。
- ・現地の高校生とのやりとりや観光を通して、シンガポールと日本の文化の違いや共通点を見いだすことができた。とても充実した4日間だった。
- ・多民族国家ならではの文化や様々な宗教を知ることができた。
- ・現地の高校生との交流でお互いの国について知ることができたり、また、流行や趣味などたくさん共感できる部分もあったりし、コミュニケーションがとても楽しく感じられた。これを機に異国の人もたくさんコミュニケーションを取りたいと思った。

【カ 成果と課題】

参加生徒はシンガポールの多文化共生社会での生活を体験することで、文化的、言語的、宗教的に異なるバックグラウンドを持つ人々がいかに共存しているかを知ることができた。また、一方で日本の文化との違いに目を向けて相違点や共通点を見いだした生徒も少なくなく、将来のグローバル人材の育成という視点からも有意義な研修であったと考えられる。

S G H課題研究の発表では、日本人とは異なる視点からの意見や感想を得て、多くの生徒が自らの視野を広げ、自ら取り組んでいる研究への可能性に気づくことができた。本研修の研究班は普段のS G Hの研究班とメンバーが同じではないが、それぞれの研究グループに持ち帰り、情報を共有する価値のある意見や感想を得ることができたように思う。

昨年同様、本年度も事前指導を早い段階から始め、発表だけでなく質疑応答など英語による即興のやりとりができるようにした。中には自らの英語の乏しさに悔しさを感じる生徒もいたが、多くの生徒は英語でのコミュニケーションに喜びを感じ、課題研究の発表も満足のいくものになった。

(3) オランダ

【ア 概要】

日 時	令和元年11月7日(木)～11月17日(日) 10泊11日
訪問先	ライデン, アムステルダム, ウィンシュホーテン (オランダ王国)
参加者	1 学年生徒5名 男子2名, 女子3名 引率教員 教諭 戸村 玲子 (英語科)
目 的	1 本校SGH研究テーマである「日本の歴史・伝統・文化」が海外でどのように紹介され, 現地の人々にどのようにとらえられているか現地調査する。 2 インタビュー・アンケート等, フィールドワークの手法を学び, 実践する。 3 SGH課題研究テーマに関する異なる観点を得ることにより, 課題研究の内容を深化させる。 4 藩校時代より本校との関係の深いオランダ王国で行われる国際青少年会議(主催 ドラードカレッジ校)に出席し, ヨーロッパ各国の高校生との協働を通じ, 国際的な視野を広げる。 5 コミュニケーション能力(英語を含む)を育成する。

【イ 日程】

月 日	スケジュール等	宿 泊
令和元年 11月 7日(木)	・成田発 ・アムステルダム着, ライデンへ移動	ホテル (ライデン)
11月 8日(金)	・ライデン現地調査(シーボルト博物館・国立民族博物館にて学芸員による説明・インタビュー) ・ライデン大学訪問(ライデン大学学生とのディスカッション) ・アムステルダムへ移動	ホテル (アムステルダム)
11月 9日(土)	・アムステルダム現地調査(アンネフランクの家) ・ウィンシュホーテンへ移動	ホームステイ (ウィンシュホーテン)
11月10日(日) ～14日(木)	・ドラードカレッジにて国際青少年会議参加 議題: <i>What will society look like in the coming decades?</i>	ホームステイ (ウィンシュホーテン)
11月15日(金)	・国際青少年会議終了後アムステルダムへ移動	ホテル (アムステルダム)
11月16日(土)	・アムステルダム発	機内
11月17日(日)	・成田着	

【ウ 事前指導】

(ア) 日程

回	日 時	内 容
1	7月18日(金)	ドラード: カレッジ, コナイン先生, 前年度派遣生徒との会
2	7月23日(水)	リーダー決め・課題確認
3	7月30日(金)	保護者説明会
4	8月 5日(火)	ディスカッション, プレゼンテーション準備
5	8月 6日(水)	SGHアクティブ国立歴史民俗博物館研修1
6	8月23日(金)	SGHアクティブ国立歴史民俗博物館研修2
7	8月30日(金)	ディスカッション, プレゼンテーション準備
8	9月 4日(水)	SGH課題研究・手法について

9	9月 6日 (金)	オランダについて (地歴公民科)
10	9月11日 (木)	ディスカッション, プレゼンテーション準備
11	9月13日 (金)	前年度派遣生徒との会
12	9月18日 (水)	ディスカッション, プレゼンテーション準備
13	9月20日 (金)	ディスカッション, プレゼンテーション準備
14	9月25日 (水)	S G H課題研究アンケート作成
15	10月 4日 (金)	S G H課題研究アンケート作成
16	10月23日 (水)	プレゼンテーションリハーサル
17	10月25日 (金)	ディスカッション準備
18	10月30日 (水)	プレゼンテーションリハーサル
19	11月 1日 (金)	ディスカッション, プレゼンテーション準備
18	11月 6日 (水)	旅行会社との最終確認・結団式 (教頭挨拶・引率挨拶 等)

*この他、英語で様々なことを説明する準備として、昼食時の会話練習 (ALT と共に週1回)

(イ) 特別講義 (「G Lアクティブ」講座)

- ① 目 的 海外で発信できる日本文化を学ぶ。中世日本の生活・文化、近世の対外関係 (長崎を通じたオランダ・中国との関係) に関する知識を深めることにより、オランダでの交流の一助とする。
- ② 日 時 第1回 令和元年8月6日 (火) 第2回 8月23日 (金)
- ③ 講 師 第1回 国立歴史民俗博物館 田中 大喜 准教授
第2回 国立歴史民俗博物館 福岡 万里子 准教授
- ④ 特別講義テーマ 「歴博で、海外に発信する日本文化を身につけよう」
第1回 歴博で近世 (江戸～幕末) の対外関係を学ぶ
第2回 歴博で中世 (平安～室町) の生活・文化を学ぶ
- ⑤ 内 容
第1回は、江戸時代オランダ人は長崎・出島でどのような貿易をしていたのか、幕末のペリー来航の頃、長崎のオランダ人は何をしていたのかについて、展示を見ながら考え、解説を受けた。第2回は日本の平安時代から室町時代にかけての、貴族から庶民までの暮らしぶりを展示について解説を受けた。

(ウ) 特別授業

- ① 目 的 オランダの歴史・政治・経済・地理等に関する知識を得ることにより、オランダに関する理解を深める。
- ② 日 時 令和元年9月6日 (金)
- ③ 講 師 関 研一 教諭 (本校地歴・公民科)
- ④ 特別授業テーマ 「オランダの地誌」
- ⑤ 内 容
オランダに関する基本的事項、地理、産業、経済、社会、文化について説明した。オランダは日本ではよく知られていないが、河川交通がヨーロッパで物流拠点として大切な役割を果たしていること、干拓によって国が作られたこと、農業が盛んなこと、自動車削減の取り組み、世界の模範とみなされてきた社会保障制度、寛容の精神についてなどについて講義を行った。

【エ 現地での活動】

(ア) フィールドワーク (ライデン・アムステルダム)

① ライデン市内

現地ガイドに、歴史と文化の町、ライデンについて、名所を訪ねながら案内してもらった。レンブラントの生家、英国からの pilgrim・ファーマーズが渡米前に滞在していた史跡などを巡った。また、ライデン市民がオランダ独立戦争で果たした役割、報償として減税よりも大学の設立を望んだこと等の説明を受けた。

② シーボルトハウス・国立民族学博物館

シーボルトハウスでは、日蘭関係担当のフォーラー邦子氏の案内で館内を見学。1823年にオランダ政庁の医官として日本のオランダ商館に派遣されたフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトが集めた美術品や日用品、植物学や動物学の資料、地図などを鑑賞した。様々な分野のものについて体系的に網羅して収集している様子がよくわかるものであった。世界の様々な民族の過去の暮らしを知ることができる国立民族学博物館では、日本・韓国コレクション学芸員のダン・コック氏の案内で、日本のコレクションを鑑賞した。本校SGHの研究テーマである「日本の歴史・伝統・文化」が海外で紹介されている様子を調査することができた。

<生徒感想例>

- ・シーボルトの収集には、完成形のものを集めたものだけでなく、その原料、作るための道具、また作っている人の模型まであった。また素材、産地などによる違いもとても分かりやすくまとめられていた。一目で製造工程が分かったり、違いが分かったりする彼の展示は、SGH研究の発表をはじめ、様々な場面で生かすことができると思う。
- ・展示品には私が習っていた琴も含まれていた。篠笛や茶道なども習っていたことがあり、今回は機会が無いが紹介したい。日本の伝統文化には他にはない魅力があると思うので発信していきたい。

③ ライデン大学学生との交流

ライデン大学にて、同大学日本語学科及び韓国語学科学生が参加する学生団体、『狸の会』の方々と交流した。「よさこいサークル」による「よさこい」のパフォーマンスを鑑賞し、シーボルトが持ち帰ったとされる日本の植物も生育する植物園、日本を初めアジア各地の言語の書籍が充実した大学図書館等を案内してもらい、昼食を共にした。

④ アンネ・フランクの家

アンネ・フランク一家が1944年にアウシュビッツの強制収容所に送られるまでの2年間を過ごしたと言われている隠れ家を訪れた。一家が住んでいた裏側の建物に通じる回転式本棚や、アンネが日記を書き続けた部屋などが当時のまま保存、展示されている。各国言語対応の音声ガイドを聞きながら見学した。

生徒たちにとって、歴史継承の重要性や、迫害や戦争などのグローバル課題について考える好機となった。

<生徒感想例>

- ・とても重い空気が滞留していて、生々しいリアルな当時の情景を想像させた。ナチスの脅威に怯えながら、物音ひとつ立てずに生活しないといけない。衛生環境は悪くプライバシーもない。それがどれだけつらいものだったかは実際に経験した人にしかわからないもので、私の想像をきくと、はるかに超えるものだろう。しかし私はあの場所で、彼らの体験をほんの一部共有することができた。心から悲しみ、心から平和を願った。
- ・ガイドの方がユダヤ人迫害を“とても大きいじめ”と表現した。この一言で、私のユダヤ人迫害に対する考え方は大きく変わった。過去の負の遺産であるが、私とはかけ離れた問題だと思っていたが、これは非常に身近な問題であると気が付くことができた。弱者を攻撃することでまとまろうとしたり、安心しようとしたりする。これが国家単位で行われたために多くの犠牲者がでたが、それと同じことが私たちの身の回りでも起こっている。

(イ) 国際青少年会議（ウィンシュホーテン）

ドイツ国境付近のウィンシュホーテンにあるドラード・カレッジが主催する国際青少年会議に参加した。参加国はオランダ、ポーランド、スペイン、ドイツ、日本の5カ国であり、初日は各学校や地域、参加生徒の紹介プレゼンテーションが行われた。今回のプロジェクトのトピックは“**What Will Society Look Like in the Coming Decades?**”（数十年後の未来の社会とは）であった。1班12～13名で構成される班に分かれ、最終日に行われる、各班が考える

『数十年後の未来の社会』についての発表に向けた議論、準備を行った。途中、分野別研修（経済、科学、アート・メディア・デザイン、社会科学）に分かれて参加し、学習、議論内容を班に持ち帰り、準備に取り入れた。最終日にはポスター、パンフレット、演劇などを用いて全体発表した。その他、アムステルダム国立美術館、市立美術館、ゴッホ美術館、現代美術館に分かれての遠足、クリエイティブ・ワークショップ（ズンバ、歌、劇、ジャンベ、書道）、インターナショナル・クッキング・フェスティバルが行われ、本校生徒もホスト宅で日本料理を用意した。

＜生徒感想例＞

- ・会議中、私は社会に対する知識の少なさを痛感した。オランダ人のみならず海外の人は社会問題や生活・文化に対する知識が豊富で、様々な観点から物事を考えられる。多くの人は新しいもの、興味を持ったものに対して、「知りたい」という意思が強く感じられた。その好奇心が、豊かな知識、自分以外を受け入れて共に活動していく力に変わっていると感じた。
- ・日本について、自分たちの生活について聞かれて十分に答えられないことが多々あり、自国の文化に対する知識のなさを思い知らされた。
- ・他国の参加者は第2外国語として学んでいる英語を流暢に話していた。私たち日本人が他国に比べ英語力が低い原因は英語に触れる機会が圧倒的に少ないことだと思う。学校の授業以外に英語に触れる機会が無い中で英語力を高めていくには、自分で英語に触れる機会を作るとしか意図考える。
- ・自分に足りないもの、グローバル社会に必要な力について考える良い機会となった。語学力はもちろんだが、わからないことは尋ね、自分の意見をはっきり伝える積極性、違いを面白いと感じ理解しようとする、多角的にもの後を見ること、柔軟な発想が大事である。
- ・Whyと聞かれて窮することが多かった。自分の考えにしっかりと理由が伴ってないということにこれまで気づいていなかった。大切なことは、結果に至るまでの過程であって、そこを疎かにしては本当の意味での結果にたどり着けないということを肝に銘じた。様々なことに真剣に向き合い、なぜそう思ったのかを聞かれても常に答えられるようにしなくてはと思った。



（ウ）SGH課題研究現地調査

国際青少年会議参加者に、課題研究に関するアンケート調査を実施した。テーマは①プラスチック・ゴミ、②食品ロス、③動物の殺処分、④ユニバーサルデザイン、⑤伝統工芸の5つである。回答数はオランダ人42名、ドイツ、ポーランド人各3名、スペイン人2名である。国毎の傾向を見る数は集められなかったため、全てをまとめて欧州高校生50名として分析した。帰国後には佐倉高校でも同じアンケート調査を実施し、結果を比較し各自の研究に生かした。

<生徒考察例>

①プラスチック・ゴミ

「この問題について学んだり話したこと」が無いと答えた欧州高校生はいなかったが、9%の佐倉高校生が無いと答え、意識の差があると感じた。生活の中でも、オランダのスーパーマーケットでは、レジ袋が有料化されており、土産屋でも、必ず「袋をお付けしますか。」と尋ねられた。日本だったら、小さい袋に入れたうえで、大きな袋にまとめて入れ、さらに土産用にと余分に袋を2,3枚くれるだろう。日本のおもてなし文化の一部であると思うが、考えていくべき問題だと思った。また、一人ひとりの意識も日本と比べて高いように感じた。ごみの分別について、ホストファミリーが細かく教えてくれ、守るようにと言われた。オランダでは、ごみは6種類に分別し、多少ややこしいが、みんな守っている。またプラスチック製品の仕様に否定的な意識も感じられた。

②フードロス

「今までに食品ロスについて学ぶ機会があったか。どこで学んだか」という問いに対しての答えは日本人とほぼ変わらず、約80%が学んだことがあり、中学校、高校、メディアが多かった一方で、「食品ロスを減らすために何かやっていることがあるか」という問い「はい」と答えたのは、日本46%、欧州が70%と大きく差が出た。これは意識の差であり、学んだことがあるけれども実行しない日本人は、もっと行動してほしいと思う。

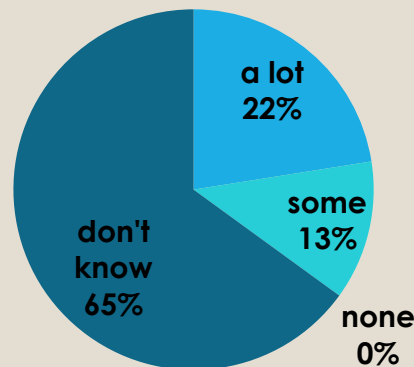
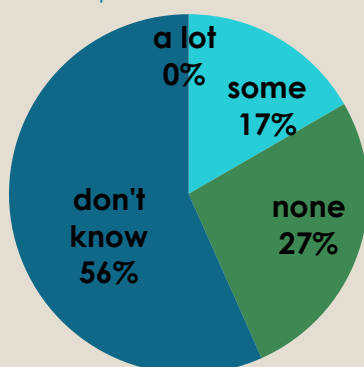
③動物殺処分

「この問題について学んだり、話したりする機会があったか」については、欧州83%、日本60%と大きな差が出た。「自分の国で保護動物の殺処分が行われていると思うか」について、欧州学生は「無い」「ある程度」という答えのみで「多数」の答えは一つも無く欧州と日本の実情を反映していると思うが、一方で欧州、日本共に「わからない」と答えた人が過半数であり、自分の国の実情を知ることの（伝えること）の重要性を感じた。

In your country, are unwanted pets euthanized?

Participants of I.Y.C. N=30

Sakura High School Students N=40



【オ 事後指導】

(ア) レポート

帰国後、生徒は研修の成果をレポートにまとめて提出した。

(イ) 報告会

① 日 時 令和元年12月23日(月)

② 対 象 1学年生徒

③ 内 容 課題研究に関する現地フィールドワークの成果と課題や、オランダで日本の文化・伝統がどのように紹介されているか、研修を経て国際的な視野・コミュニケーション能力について考えたことについて報告した。

(ウ) アンケート

帰国後、参加生徒にアンケートを実施した。

1 この研修に参加して日本の歴史・伝統・文化をより深く理解する必要性を感じた。			
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
5人	0人	0人	0人
2 この研修に参加して外国の歴史・伝統・文化に関する興味・関心が高まった。			
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
5人	0人	0人	0人
3 日本の歴史・伝統・文化を外国人に英語で説明することができる。			
かなりできた	まあまあできた	あまりできなかった	全くできなかった
0人	5人	0人	0人
4 課題研究の内容についてオランダの高校生や大学生と英語で話し合うことができた。			
かなりできた	まあまあできた	あまりできなかった	全くできなかった
1人	4人	0人	0人
5 今回の海外研修で、課題研究に関する新たな(異なる)視点・情報を得る機会があった。			
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
4人	1人	0人	0人

【カ 成果と課題】

この研修の目的1「本校SGHの研究テーマである『日本の歴史・伝統・文化』が海外でどのように紹介され、現地の人々にどのようにとらえられているか現地調査する」は十分に達成された。シーボルトハウス・国立民族学博物館の収蔵品や展示の方法には、シーボルトの日本滞在時の日本人の暮らしぶりがよくわかる工夫がなされており、日本人にとっても興味深く、学ぶところの多いものであった。また、生徒は、学校生活・文化紹介準備の過程での本校ALT等からの助言や、現地での発表への反応、ホストファミリーや友人との交流を通して日本の歴史・伝統・文化がどのようにとらえられているかを知ることができた。さらに、全員が、自己の知識不足を実感し、自国の文化・伝統について興味を持って学ばせ、説明できることの必要性を口にしていく。

目的2「インタビュー・アンケート等、フィールドワークの手法を学び、実践する」及び、目的3「SGH課題研究テーマに関する異なる観点を得ることにより、課題研究の内容を深化させる」については、昨年同様、事前にアンケート用紙を作成し、ドラードカレッジ学生、ホストファミリー等から貴重なデータ収集をすることができた。さらに、帰国後、同じ内容のアンケートを本校生徒にも実施し、日本との比較をした。アンケート作成の過程で、回答しやすい発問の仕方や、各自のトピックについて語る上で必要な語彙表現、収集したデータの比較に適したグラフや提示方法について学ぶ機会にもなり有効であった。1年の現時点では、課題研究も調査の段階であるが、十分に異なる観点を得る機会となったと言える。

目的4「藩校時代より本校との関係の深いオランダ王国で行われる国際青少年会議(主催ドラードカレッジ校)に出席し、ヨーロッパ各国の高校生との協働を通じ、国際的な視野を広げる」目的5「コミュニケーション能力(英語を含む)を育成する」についても十分に達成された。全ての生徒が口にしていったのは、「日本人が普段英語を使う機会が圧倒的に少ないこと」であり、自分で意識して学習に取り組む必要性である。また「海外の学生が自分の意見を十分な説明と共に述べることに慣れており、自分の国の歴史、文化や時事問題にも詳しく、人に説明ができる」ということであり、自分たちもそうあらねばと強く意識したようである。また、英語はもちろん、他のヨーロッパ言語及び文化に対する興味・関心も高まった。

課題としては、例年の琴ながら、1年生が参加するために、国際青少年会議プロジェクトで扱われる話題に対する知識や、英語の語彙表現力が不足気味になる点である。毎年できる限り早く、より具体的な情報をプロジェクト責任者から入手し、事前指導で扱うようにしており、それなりに効果はあると考えられるが、さらに充実させることができると良い。

(4) ドイツ

※ 新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、中止となったが、当初予定されていたものは掲載した。

【ア 概要 (当初の予定)】

日 時	令和2年3月13日(金)～3月19日(木) 6泊7日間(機内泊1日を含む)
訪問先	デュッセルドルフ(ドイツ連邦共和国)
参加者	2学年生徒10名 男子4名, 女子6名 引率教員 教諭 戸村 玲子(英語科), 滝口 圭太(英語科)
目 的	1 現地の学生・社会人を対象に課題研究の成果を発表し, フィードバックを受け, ディスカッションを通じて異なる視点を得たりすることにより, 課題研究テーマについて考え, まとめる一助とする。 2 課題研究のテーマに関わる調査等を通して, 生徒自身の研究に必要な情報を収集し, 研究を深化させる。 3 活動全体を通じて教養を高めるとともに, 現地の学生との交流を通じて国際的視野を広げ, さらにコミュニケーション能力を高める。

【イ 日程 (当初の予定)】

月日	スケジュール等	宿泊
令和元年 3月13日(金)	・成田発 ・デュッセルドルフ着	ホテル
3月14日(土)	・現地調査(ケルン大聖堂, ボン歴史博物館等)	ホテル
3月15日(日)	・現地調査(デュッセルドルフ市内, エッセンツォルフフェアイン炭鉱遺産郡等)	ホテル
3月16日(月)	・デュッセルドルフ日本総領事館, デュッセルドルフ市庁舎訪	ホテル
3月17日(火)	・ツェツィリアンギムナジウム(現地高校)訪問	ホテル
3月18日(水)	・デュッセルドルフ大学訪問 ・デュッセルドルフ発	機内
3月19日(木)	・成田着	

【ウ 事前指導】

(ア) 日程

回	日時	学習内容
1	11月 5日(火)	リーダー決め, パスポート申請書配布, 予定確認
2	11月21日(木)	SGH課題研究確認
3	12月 6日(金)	保護者説明会
4	12月12日(木)	プレゼン準備, 書類提出
5	12月13日(金)	ドイツ事情(本校 関教諭)
6	12月23日(月)	SGH発表準備, 冬休み前の確認
7	1月 9日(木)	特別講義(GLアクティブ) (本校同窓生 寒郡茂樹氏)
8	1月16日(木)	プレゼン準備
9	1月17日(金)	プレゼンスライド+原稿提出
10	1月23日(木)	プレゼン+Q&A
11	1月24日(金)	プレゼン準備
12	1月30日(木)	プレゼン+Q&A
13	1月31日(金)	プレゼン準備
14	2月 7日(金)	プレゼン+Q&A

15	2月20日(木)	デュッセルドルフ大学生来校。プレゼン+Q&A プレゼン準備
16	2月21日(金)	プレゼン+Q&A
17	2月27日(木)	プレゼン準備(最終)
18	3月12日(木)	結団式 校長挨拶, 引率挨拶, 最終確認(予定)

*この他、英語で様々なことを説明する準備として、昼食時の会話練習(ALTと共に週1回)

(イ) 特別授業

- ① 日時 令和元年12月13日(金)
- ② 目的 ドイツの歴史・政治・経済・地理などに関する知識を得ることにより、ドイツに関する知識を深める。
- ③ 講師 関 研一教諭(本校地歴・公民)
- ④ テーマ ドイツの地誌
- ⑤ 内容 ドイツに関する基本的事項、地理、歴史、産業、社会・文化について説明した。東西ドイツの分断と統一の歴史、エネルギー政策、自動車、電機・電子、精密機械などの工業製品輸出の高さ、移民・難民受け入れの状況など、生徒がドイツを訪問する上で必要かつ課題研究に関係した内容であった。

(ウ) 特別講義

- ① 日時 令和2年1月9日(木)
- ② 目的 ドイツ及びデュッセルドルフなどに関する情報を得ることにより、ドイツに関する知識を深める。
- ③ 講師 寒郡 茂樹氏(本校同窓会副会長)
- ④ テーマ 「世界の市場を視野に入れたビジネスモデルについて学ぼう」
- ⑤ 内容 ビジネスでドイツ各地、特にデュッセルドルフ市に度々訪問し造詣の深い寒郡氏より、ドイツ人気質や文化、街の様子、商業における見本市の役割、千葉県とデュッセルドルフ市のつながりなどについてお話しいただいた。また、自身の起業体験、起業のノウハウ、「ボンサイ」ビジネスをヨーロッパで展開した際の体験談をお話しいただいた。後半部分では、生徒の課題研究に関連した質問にも丁寧に答えていただいた。グローバル人材として、語学力ももちろんであるが、様々なことにチャレンジし経験を積んで実務能力を備えていくこと、異文化への理解と共に、自国の文化を深く理解し発信できることが大事だという激励の言葉をいただいた。

【エ 平成30年度実施報告(平成31年3月13日～19日)】

(ア) デュッセルドルフ日本総領事館訪問

- ① 総領事挨拶
- ② ブリーフィング
副領事より総領事館の役割等について説明をいただいた。
- ③ 課題研究発表
3つの研究「平和教育(戦争を語り継ぐ)」「伝統工芸品を広めるための試み(組紐)」「動物保護(殺処分される動物を減らすための保護施設支援)」について、各10分の英語での発表の後、副領事および現地スタッフ(広報文化班)の方より質問、助言、現地での取り組みについての説明を頂いた。現地での初めての発表であったが、発表生徒は質問にも良く答えることができた。

(イ) デュッセルドルフ市庁舎訪問

- ① 市手配のガイドによる90分の旧市街ツアー
- ② ブリーフィング
担当者3名より、デュッセルドルフ市と日本、日本企業とのつながり、文化交流や行事などについて説明を受けた。また、参加生徒の研究課題である、平和教育、動物保護、

環境への取り組み（外来種生物，食用油の処理，リサイクル）などについて，デュッセルドルフ市やドイツでの取り組みについての説明を受け，質疑応答を行った。

③ 市長による歓迎式

生徒は本校書道教諭による書の掛け軸，剣道部の手ぬぐいなどを渡し，英語で説明を行った。

（ウ）デュッセルドルフ大学訪問

① S G H課題研究発表

2～3名×5グループの本校生に対し日本語専攻の大学生1名がついて，10分ずつの英語による発表と質疑応答を3ローテーション行う。大学生は1つ1つの発表に対して，質問，改善のための提案や，発表の仕方や発表資料の作り方に至るまで細かく丁寧に助言をしてくれた。3ローテーション行ったことで，生徒にとっては発表の練習にもなり有意義な時間であった。

② 交流

2グループに分かれて日本語・英語で会話した。日本の大学への留学を終えて帰国した大学生，この秋に留学する大学生など日本語が流ちょうで日本の文化にも興味のある学生がほとんどであり，日独の文化の違いなど様々なことについて話をすることができた。



（エ）ツェツィリアン・ギムナジウム訪問

① S G H課題研究発表

本校生が2グループに分かれ，歴史，地理，生物，日本語などの授業の中で，課題研究発表を行ない，現地生徒との質疑応答を行った。全ての生徒が3種類の授業に参加し，各自2回から3回の発表を行うことができた。

② 昼食会

現地校の生徒が持ち寄った様々な料理を食べながら自由に話すスタイルで交流した。

③ 佐倉紹介発表及び交流

日本語授業受講者に向けて課題研究発表1つ（佐倉市観光プロモーション）を行った後，日本語もしくは英語で日本の学校生活（部活動，進路など）について会話をした。

（オ）現地調査

ツォルフェアイン炭鉱遺産（ルール工業地帯），ボン現代歴史博物館，ボン大学周辺，ベンラート城，アウグストゥスブルク城，ケルン大聖堂，デュッセルドルフ市内（旧市街，メディアハーベン），ドルトムント市内など。

ドイツの歴史の様々な時代の生活の様子や政治情勢，産業，宗教，建造物，及び地域の特徴などについて学ぶことができ大変有意義であった。

(カ) 事後指導

a レポート

帰国後生徒は研修の成果をレポートにまとめて提出した。その中で、現地での発表についていただいた助言や生徒の感想を一部抜粋する。

テーマ：戦争を語り継ぐ

- ・ドイツには、戦争やホロコーストに関する博物館など、過去の歴史を学ぶことができる場所がたくさんあり、生徒たちが学校の授業の一環として、それらの場所に行き学ぶこともある。また、ドイツでは、歴史や文学など、様々な授業で戦争について学ぶ。
- ・大学でも、授業の一つとして戦争の歴史について学ぶが、教授が一方的に語る事も多い。私たちのように、高校生が他の生徒や小学生に向けて授業をするというスタイルは年齢も近い同士で積極的に取り組むことができ、よい試みであると言う感想もいただいた。
- ・ドイツは、大量虐殺という負の歴史も抱えており、この研究に対し否定的な意見も寄せられるのではないかと予想していた。しかし、実際に得られた意見は「歴史に向き合い、将来に何をすべきか考えていく」という、とても前向きなものであり、若者がそのように考えることは平和を築く上でとても重要であると思った。ただし、ドイツの平和教育について日本と同様、情報は与えられるが、そこで終わってしまうことも多いのではと感じた。日本でもドイツでも、与えられたものから、自分が将来すべき事を考え行動していくことが重要であると思う。
- ・日本でもやがて戦争体験者がいなくなる時代が来るが、その時代が来た時に、過去の歴史を正しく伝え、率先して平和を保とうと努力する必要がある。

テーマ：伝統工芸品を広めるための試み（組紐）

- ・日本総領事館では、日本人の伝統工芸職人も多くデュッセルドルフに住んでいると教えていただいた。デュッセルドルフ市、ドイツが海外に目を向ける姿勢を見習い、外国人をターゲットに日本の伝統工芸職人を増やすという道もありなのではと考えた。
- ・市庁舎、大学、高校で伺ったところ、ドイツで受け継がれている伝統工芸品と言って、すぐに思いつく物は少なそうである。ただし、ビールの醸造のように伝統を受け継ぎつつ、新しい時代の人々の好みに合わせて工夫している点は、伝統工芸品と同じである。また、屋根葺きの職人など、職人になるための専門学校はあるが、入学者は少なく伝統産業従事者の減少についても共通点がある。
- ・伝統工芸品を見てもらったり、お土産としてプレゼントすると、興味を持ってもらうこともできた。私たちが考える、「心を表わし、人とのつながりを生み出す」伝統工芸品の力を身をもって感じる事ができた。
- ・自分たちのプランでは、組紐を広める一つの方法として、訪日客に買ってもらう事も考えていたが、日本のようなお土産文化がない国も多く考える必要がある。
- ・自分たちの提案した組紐を使った品物の中では、実用的な筆箱が好評であった。逆に時計ストラップ時計を身につける習慣がない人が増えていることから需要が少ないのではと言う感想が多かった。
- ・商品の値段や見込む利益についてまで考えた提案が必要である。

テーマ：統一ピクトグラムによるゴミ分別

- ・ドイツの大学生、高校生から意見をもらい、また市役所でドイツでのゴミ分別について説明を伺ったり、街中の公共のゴミ箱についても観察する中で私が感じたことは、ドイツの方がゴミの分別が進んでいるということである。ドイツでも日本同様細かい分別がなされているが、分類や種類別の捨て方が国全体で統一されている。ゴミの種類を表す記号や色も統一されており、これは家庭ゴミの処理だけでなく、公共の場に設置されているゴミ箱にも反映されている。日本のゴミ分別は細分化が進みすぎており、市町村毎に分別の仕方も違う。また、公共の場でのゴミ箱では分別がなされていない物も多々見受けられる。家庭でのゴミ分別はしていても、公共の場では意識が低い場合も多いと思う。日本におけるゴミ分別への意識についても考えさせられる旅であった。
- ・日本のゴミ分別について体験してもらいながらの発表形式については、実際に複雑さを体験できてよいと褒めてもらった。
- ・ゴミ袋自体もプラスチック製品なのだから、1回1回使うのは勿体ない。ゴミだけをまとめて捨てられるシステムを導入すべき、という斬新なアイデアも大学生からいただいた。

b 報告会

- ① 日 時 令和元年5月7日（火）GL 総合的な学習（探究）の時間
- ② 対 象 1・2 学年生徒
- ③ 内 容 SGH 課題研究の発表や訪問先での活動報告。

c アンケート

帰国後、参加生徒にアンケートを実施した。

1 この研修に参加して日本の歴史・伝統・文化をより深く理解する必要性を感じた。			
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
7 人	4 人	0 人	0 人
2 この研修に参加して外国の歴史・伝統・文化に関する興味・関心が高まった。			
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
8 人	2 人	0 人	0 人
3 日本の歴史・伝統・文化を外国人に英語で説明することができた。			
かなりできた	まあまあできた	あまりできなかった	全くできなかった
2 人	7 人	2 人	0 人
4 自分の課題研究をドイツの高校生や大学生を対象に英語でプレゼンテーションすることができた。			
かなりできた	まあまあできた	あまりできなかった	全くできなかった
7 人	3 人	1 人	0 人
5 課題研究の内容についてドイツの高校生や大学生と英語で話し合うことができた。			
かなりできた	まあまあできた	あまりできなかった	全くできなかった
2 人	7 人	2 人	0 人
6 今回の海外研修で、課題研究に関する新たな（異なる）視点・情報を得る機会があった。			
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
3 人	5 人	3 人	0 人

この海外研修で学んだこと、得たこと、感じたこと等、自由に書いてください。

- ・大学・高校でプレゼンテーションを行った時、多くの学生が興味を持ってくれた印象を受けたので、これからも続けられる範囲で課題研究を続けたい。
- ・グラフ等の数値が正確かどうか、また、データの出典がどこか等、情報の正確さが問われる場面が多くあった。情報が正確であることがわかることによって、プレゼンテーション自体の信用にも繋がると感じたので、参考文献も翻訳する等、なるべくわかりやすくするべきだと思った。
- ・案を作るにあたって他人の意見をもっと取り入れるべきだと指摘され、視野を広げることが必要だと感じた。
- ・高校生が小学生を対象に戦争について語るということについて、「ドイツでは学校の授業や博物館等で戦争の歴史を知る機会が多い。しかし、時にはそれらが退屈に感じられることもあるし、先生から生徒に教えるという形が定着してしまっている。だから、ある生徒が別の生徒に教えたり、生徒同士で相互に教え合うという形は、効果的で良いと思った。」という趣旨の意見をもらった。
- ・ドイツでは伝統工芸を守るという意識が薄いと感じた。まず、「伝統工芸」と言われて思い浮かぶものがあまりない様子であった。
- ・動物殺処分の問題について話す中で、日本人が犬や猫を捨てるということが信じられない様子だった。日本人が犬や猫を捨てる理由として、意識の違いを聞かれた。また、居住地の面積の違いが関係しているのではないかと指摘された。
- ・ヨーロッパでは紅茶か緑茶かの区別しかないの、煎茶と抹茶の違いをなかなかわかってもらえず、説明するのが大変だった。抹茶味のお菓子はドイツ人に受け入れられるか不安だったが、珍しがって喜んでもらった。
- ・あんこを広める方法について、質疑応答やディスカッションの時に自分たちが考えてもいなかった案を出してもらった。
- ・ドイツでは日本と違ってあまり家で沢山の油を使わないということがわかった。
- ・ドイツは衣食住のうち衣食にはあまり関心がなく、その代わり住環境へのこだわりが強いことがわかった。建物は歴史的なものもモダンなものもどれも凝っていて、見ていて面白かった。
- ・英語を学ぶ方法が違ふと感じた。ドイツではより実践的でスピーキング重視であり、学んでいる年数はさほど変わらないのに明らかな差があった。その要因は日本では受験勉強があるからだと思う。
- ・今回現地の人と話す中で、海外の人は相手の目を真っ直ぐ見て話していることに気づいた。この仕草で興味があるということが伝わってきたので、私も意識するようにしていきたい。
- ・日本人は空気を読んで発言しないこともあるけれど、ドイツ人は正直に発言していて、その姿勢を見習いたいと思った。
- ・文化の違いを感じたが、それ以上に共通点を見つけられて楽しかった。
- ・この派遣で一番感じたのは、英語はコミュニケーションツールであり、一番大切なのは伝えようとする気持ちであるということ。普段言われていることを身をもって感じることができた。でも、スムーズにコミュニケーションをしたり、話をより深めたりするために、英語のスキルはとても重要になってくると思う。
- ・初めての海外で緊張もあったけれど、参加して本当に良かった。今回できた新しい引き出しを将来に活かしたい。

(キ) 成果と課題

派遣2回目の平成31年度派遣では、前年の成果と課題を踏まえ、課題研究発表のプログラムに関する改善を図ることができた。具体的には、大学訪問を高校より先にしたこと、生徒全員が、発表に対する細かなアドバイスを受ける機会を複数回持つことができ、高校での多人数を相手の発表でも、より自信を持って発表することができた。高校での発表についても、異なる対象生徒に複数回ずつ発表する機会を作ってもらった。また、積極的に質問をしてもらった。デュッセルドルフ市庁舎においても、生徒の発表の機会は昨年同様なかったが、予め連絡してあった生徒の研究テーマについて、ドイツや市の取り組みについての情報をスライドにまとめて準備し、紹介してくださり、大変有意義であった。

今回も、派遣生徒決定後より事前研修を行い、課題研究のプレゼンテーション準備及びリハーサル、ドイツに関しての文化や歴史等の基礎知識の学習を行った。プレゼンテーションリハーサルでは参加者同士だけでなくALTや英語科教員から様々な質問をしてもらいQ&Aに備え、一定の効果は見られたが、それでもやはり、生徒は、英語での即興的かつ複雑な話になった時に力不足を感じたようである。また、表現力だけではなく、特に自国の文化、歴史等に対する知識・教養を身につける必要性を実感する良い機会となったようである。さらに、現地を訪れ、人々と交流してこそ見える、日本社会や日本の学生に足りない部分についての気づきも多く、この点も有意義であった。

(5) イギリス

※ 新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、中止となったが、当初予定されていたものは掲載した。

【ア 概要 (予定)】

日 時	令和2年3月21日(土)～3月28日(土) 7泊8日間
訪問先	ロンドン近郊(グレートブリテン及び北アイルランド連合王国)
参加者	2学年生徒10名 男子5名、女子5名 引率者 教諭 尾竹 陽子(英語科)・大東 剛(英語科)
目 的	1 現地の学生との交流を通じて国際的視野を広げるとともに、英語によるコミュニケーション能力を高める。 2 異文化への理解を深めるとともに、自国の文化を再認識する。 3 現地の高校生を対象に課題研究の成果を発表するとともに、ディスカッションを行い、考えを深め、異なる視点を得たりすることにより、課題研究を深化させる。

【イ 日程 (予定)】

月日	スケジュール等	宿泊
令和2年 3月21日(土)	・成田発 ・ロンドン着	ホームステイ
3月22日(日)	・ホストファミリーとの交流(コッツウォルズ)	ホームステイ
3月23日(月)	・オックスフォード大学でのプレゼンテーション・ディスカッション	ホームステイ
3月24日(火)	・ジャパンハウス訪問プレゼンテーション, Ecotocity 社訪問	ホームステイ
3月25日(水)	・ホリポートカレッジ(バークシャー)でのプレゼンテーション・ディスカッション等	ホームステイ
3月26日(木)	・ロンドン現地調査	ホームステイ
3月27日(金)	・ロンドン発	機内
3月28日(土)	・羽田着	

【ウ 事前指導】

(ア) 日程

回	日 時	学習内容
1	1 1 月 2 1 日 (木)	グループ、リーダー決め・課題研究確認
2	1 1 月 2 2 日 (金)	各グループ、プレゼン内容と準備計画書を提出
3	1 2 月 6 日 (金)	保護者説明会
4	1 2 月 1 2 日 (木)	課題研究プレゼン準備
5	1 2 月 1 9 日 (木)	課題研究プレゼン準備
6	1 2 月 2 3 日 (月)	課題研究プレゼン準備
7	1 月 9 日 (木)	イギリス地誌 (関先生)
8	1 月 1 6 日 (木)	プレゼンスライド+原稿 提出
9	1 月 2 3 日 (木)	プレゼン準備 (原稿修正)
1 0	1 月 3 0 日 (木)	プレゼン+Q&A
1 1	1 月 3 1 日 (金)	プレゼン準備
1 2	2 月 7 日 (金)	プレゼン+Q&A
1 3	2 月 2 0 日 (木)	プレゼン準備
1 4	2 月 2 1 日 (金)	プレゼン+Q&A
1 5	2 月 2 7 日 (木)	プレゼン準備 (最終調整)
1 6	3 月 1 2 日 (木)	プレゼン+Q&A (予定)
1 7	3 月 1 8 日 (水)	結団式・最終確認 (予定)

(イ) 特別授業

- ① 日 時 令和 2 年 1 月 9 日 (木)
- ② 目 的 イギリスの歴史・政治・経済・地理などに関する知識を得ることにより、イギリスに関する知識を深める。
- ③ 講 師 関 研一教諭 (本校地歴・公民)
- ④ テーマ イギリスの地誌
- ⑤ 内 容 イギリスに関する基本的事項、地理、歴史、産業、社会・文化について説明した。特にEU離脱によるイギリス社会・経済の変化や日本経済に与える影響などもふまえて講義した。また、各種産業の様子や移民・難民受け入れの状況など、生徒がイギリスを訪問する上で必要かつ課題研究に関係した内容であった。

【エ 平成 3 0 年度実施報告 (平成 3 1 年 3 月 2 2 日～2 9 日)】

(ア) 課題研究テーマ

テーマ	人数	内 容
動物殺戮処分	3 名	ペットの殺戮処分の現状とそれをなくす対策について考える。諸外国での状況と比較しながら方法を模索する。
空き家を使った宿泊施設	1 名	空き家の件数が増えている現状において、空き家を宿泊施設として有効利用すれば経済効果もあるのではないか。
政治的関心を高める	1 名	政治に無関心な若者たちをターゲットに、どうしたらもっと関心を持ってもらえるか、その方法を提案する。
農泊	1 名	農業体験付きの農泊プランで外国人の宿泊も増え、疎化が進む地域に活気が戻るのではないか。
食品ロス	1 名	身の回りにある食品の無駄 (買いすぎ、消費期限切れ等) と、無駄を減らす調理を提案。
Peace Keeping	1 名	戦争の悲惨さを次代に語り継ぐ「語り部」の活動を紹介。戦争そのものについてもディスカッション。
伝統工芸の知名度 UP	1 名	伝統工芸の組紐の知名度を上げるために、若者に人気が出そうなデザインを工芸氏と共に開発するプロジェクト。
地名の由来	2 名	千葉県地名から災害が起こりやすい地域を確定し、ハザードマップを作成する活動。
ピーナッツレボリューション	1 名	千葉県の名産であるピーナッツの殻を有効利用するための商品開発プロジェクト。

(イ) オックスフォード大学訪問

1時間ほどのキャンパス案内の後、課題研究プレゼンテーションの指導助言を受けた。4つのグループに分かれ、それぞれに大学生がつき、プレゼンテーションの内容、及び仕方についての確且つわかりやすい助言を受けることができた。生徒は自ら質問生積極的にコミュニケーションをとっていた。

(ウ) ジャパンハウス訪問

ロンドンから日本文化を発信している「ジャパンハウス」を訪れた。今年度から始まった企画である。大通り沿いにあるジャパンハウスの入り口には抹茶が飲めるカウンターがあり、一階フロアは日本の文化が様々な形で紹介されている。職員からジャパンハウスの活動について説明を受けた。日本の伝統工芸の紹介や、日本文化に関する講演会など、日本について発信する様々なイベントがロンドンで行われていること、日本人でない8割の現地スタッフの日本文化に対する知識の豊富さに驚いた。生徒はスライドに映る伝統工芸や伝統行事を知らない、日本文化に関して質問されても答えられないなど日本文化に対する知識が無いことへのもどかしさを実感したようである。

(エ) クレアロンドン事務所訪問

日本の地方自治体と欧州9カ国の友好協力や経済協力の発展のためのサポートを行っているクレアロンドン事務所を訪れた。最初に映像によるイギリスの文化に関する説明があり、その後、代表で4名の生徒がプレゼンを行った。(伝統工芸・食品ロス・空き家活用・動物殺処分)2名の職員の方から、たくさんのコメントをいただいた。また、内容についてイギリスとの比較などについての情報を多く得ることができた。

(オ) ホリポートカレッジ訪問

ホリポート高校は、公立高校ながら学生寮を完備し、ヨーロッパや香港などからも多くの留学生が在籍している国際色豊かな高校である。オリエンテーション、交流、校舎案内、ランチの後、2部屋に分かれて課題研究プレゼンテーションを行った。この日までに、オックスフォードとクレアロンドン事務所で練習を重ね、かなり難しい質問にも対応してきたためか、どの生徒も落ち着いて自信を持って臨むことができたようである。ホリポートの生徒たちも熱心に耳を傾け、積極的に質問をしていた。また、同じ高校生同士の質疑応答ということもあり、リラックスした様子でコミュニケーションをとっていた。



(オ) 事後指導

a レポート提出

帰国後、生徒は研修の成果をレポートにまとめた。

b 報告会

- ① 日時 令和元年5月7日(火)6限 GL探究(総合的な学習(探究)の時間)
- ② 対象 1・2学年生徒
- ③ 場所 本校体育館
- ④ 内容 現地校で行った課題研究の発表や訪問先での活動報告

c アンケート

帰国後、参加生徒にアンケートを実施した。

1 この研修に参加して日本の歴史・伝統・文化をより深く理解する必要性を感じた。				
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	計
10	2	0	0	12
2 この研修に参加して外国の歴史・伝統・文化に対する興味・関心が高まった。				
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	計
9	3	0	0	12
3 日本の歴史・伝統・文化を外国人に英語で説明することができる。				
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	計
2	9	1	0	12
4 課題研究の内容についてイギリスの高校生や大学生と英語で話し合うことができた。				
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	計
9	3	0	0	12
5 今回の海外研修で、課題研究に関する新たな（異なる）視点・情報を得る機会があった。				
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	計
9	3	0	0	12

(カ) 成果と課題

研修の目的1「現地大学生との交流を通じて国際的視野を広げるとともに、英語によるコミュニケーション能力・プレゼンテーション能力の伸長を図る。」オックスフォード大学の学生との交流において、1人の大学生に佐高生2～3名という小グループでプレゼンテーションを行えたことは大変有意義であった。大学生たちは課題研究の内容だけでなく、プレゼンテーションの効果的な方法や、インパクトのあるスライドの作り方、そしてスピーチの方法など、多義にわたって熱心にアドバイスを与えてくれた。また、クレアロンドン事務所では大人の視点からのアドバイスをもらうことができた。どちらの場面でも生徒全員が積極的に質問や自分の意見を述べていたのがとても印象的であった。この2つのプレゼンテーションの経験は、生徒たちの国際的視野を広げ、英語でのコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力の伸長に役だったことは言うまでもない。

目的2「英国の文化・伝統に触れ、異文化への理解を深めるとともに、自国の文化を再認識する。」については、まず、ロンドン研修で訪れた大英博物館をはじめとして、ウエストミンスター寺院、バッキンガム宮殿においては近衛兵の交代の儀式などを間近に見ることができ、ロンドンの通りを歩きながら英国という歴史と伝統を肌で感じることもできた。さらに、今回の研修では昨年までとは違い、生徒は1週間ホームステイをした。これは最も効果的な異文化理解だったのではないだろうか。日々の生活の中で、身近な生活習慣の違いを理解し、ホストファミリーとの会話の中に考え方の相違を見だし、自国の文化を再認識し、かつ自分を見つめ直す大変良い経験になったと思う。この形は来年以降も継続すべきである。

目的3「現地高校生を対象に課題研究の成果を発表するとともに、質疑応答やディスカッションなどを通じて異なる視点からの考えを知り、研究を深化させる。」については、オックスフォード大学生たちによる指導やクレアロンドン事務所でも様々な助言を経て、ホリポートカレッジでは生徒たちは全員自信を持って堂々と最終プレゼンテーションを行うことができた。3カ所でのプレゼンテーションによって、日本では考えも及ばなかった様々な質問を受け、それを日本に持ちかえり、さらに研究を深めることができ、日本の課題研究グループメンバーにとっても大きなフィードバックになった。

このイギリス研修は、毎年改善されている。今回もジャパンハウスとクレアロンドン訪問が加わり、オックスフォードでのプレゼンテーション練習を小グループにし、宿泊地も英国の美しさを感じられるコッツウォルズに変更し、ホームステイを取り入れた。来年度にはジャパンハウスでも発表をさせていただくと、日本に造詣の深い現地スタッフから様々な助言を頂けるのではないかな。